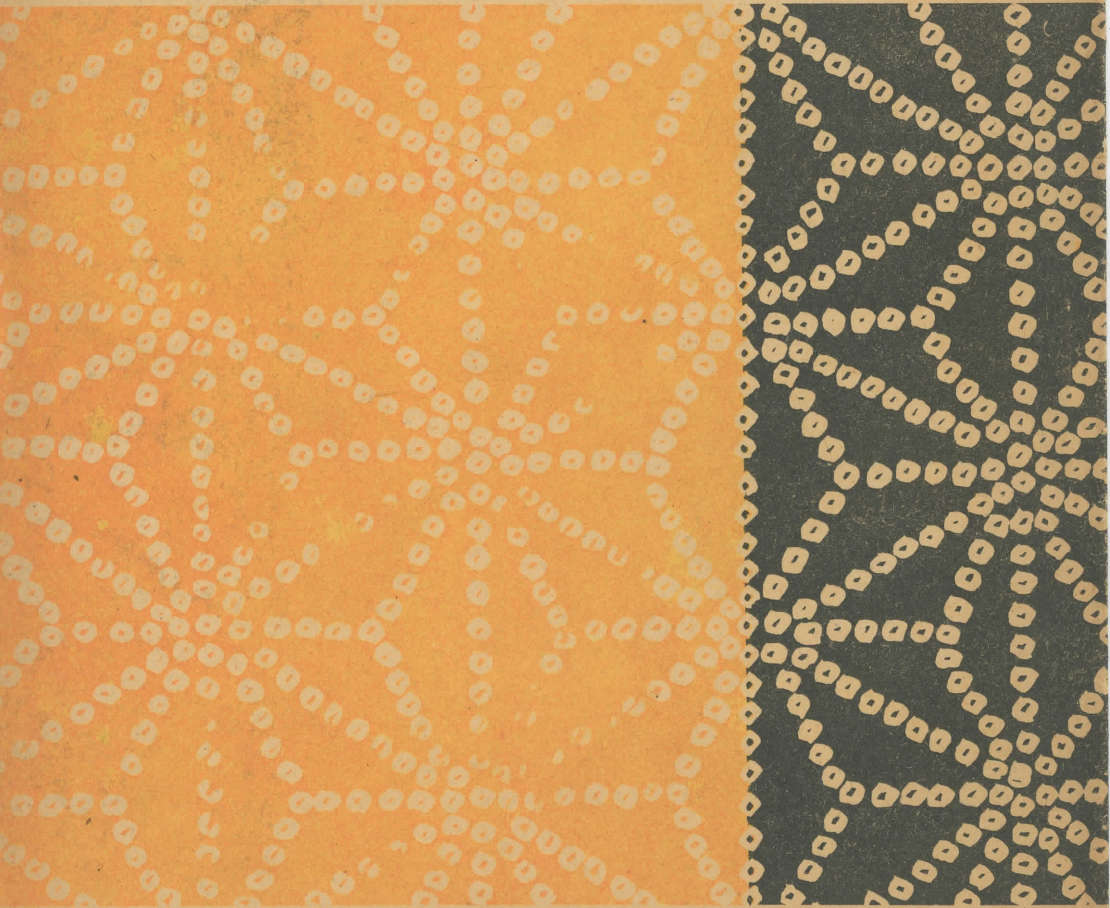


後天樂人新編醫

全英戲園

第四回



新橋橫舞場

警報發令時に於ける防空上の措置要綱試案

一、空襲警報の場合は勿論、警戒警報發令の場合も直ちに興行を中止し警報解除まで休場致します。

二、右により興行中止の場合に於ける既に發賣済みの入場券は左記の方法で御取扱ひ致します。

(イ) 興行開始中警報發令により即時中止されし場合、その中止時刻が全興行時間の三分の二を經過せざる時は、警戒解除の翌日より御買求めの場所に於て他日の入場券と御取扱ひだけを致し御拂ひ戻しは致しません。

(ロ) 開演後三分の二時間を經過したる時は御引換へを致しません。

(ハ) 興行開始前の前賣入場券は可成他日の入場券と御引換へ下さる様御願ひ致します。

但し御引換へは警戒警報解除の翌日より向十日間以内に該入場券御買求めの場所にて御取扱ひ致します。

三、警戒解除されたる場合は左記の如く興行を開始致します。

(イ) 警戒解除が當日興行開始時間の四時間以前の場合には當日の興行を開演致します。

(ロ) 若し四時間以内の場合には當日の興行を開演せず、その翌日より普通通り開演致します。

四、以上種々の場合に備へる爲め御買求めの入場券は必ず御用済みまで御所持願ひます。

大阪 文樂座 人形淨瑠璃芝居
全員引越興行

第四回 (廿七日迄)

關取千兩幟

猪名川内の段

軍事保護院後援
西亭作並作曲

新作 晴着の子寶

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

梅川、戀飛脚大和往來
忠兵衛

新口村の段

妹背山婦女庭訓

道行戀の小田卷

昭和十八年十二月一日初日

毎夕五時開演

御觀劇料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等：(御一名)：四圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十錢(同四割共)

切符取扱所

銀座地下鐵街芝居切符賣場
プレイカイド各店取扱
電話銀座一八七六九七〇
銀座本店電話京橋五〇一三まで

切符賣場用 電話銀座 七五五七
事務所用 電話銀座 七五八七
お客用 電話銀座 一九〇

木挽町

新橋演舞場

猪名川内の段

關取千兩幟

猪名川内の段

猪名川 竹本住太夫

明和四年八月、大阪竹本座が初演である。作者は近松半二、三好松治、竹田文吉、

おとわ 豊竹呂太夫

竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛で、全曲九段からなり、その中で第二段目猪名川内（今度上演）から相撲の段が特に有名

鐵ヶ嶽 竹本織太夫

である。出處は當時大阪で、人氣力士として最辰の血を湧き立たせてゐた稻川と、千

大坂 竹本つばめ太夫

田川とに絡ませたもので「双蝶々曲輪日記」

呼遣イ 竹本濱太夫

（寛保二年七月竹本座上場、作者は竹田

豊竹司太夫

出雲、三好松治、並本千柳）の、力士達引

竹本隅若太夫

を翻案して趣向を凝らしたものである。尙

豊竹松島太夫

原作では、猪名川は岩川とあるが、文政二

鶴澤綱造

年九月座摩境内の興行の時から、猪名川と

鶴澤友三郎

改めて今日に及んだのである。

弓 鶴澤友三郎

猪名川の堀江の假住居には、最辰客

からの祝儀贈物が、賑々しく飾つてある。往き來の人はその威勢のいいのを眺めながら、猪名川の全勢をほめたたへてゐた。内ではこれを耳にする女房

おとわの顔が歡喜に輝いてゐた。敵方の力士鐵ヶ嶽を伴つて、猪名川が歸つて來たので、おとわはこれを迎へて愛想よく會釋する。折柄、大阪屋から使ひが來て、

「錦木身請けの殘金を、今日中に拂つて欲しい。明日になつたらよん所なく他の身請け客に渡さねばなりません」と、歸つて行つた。

猪名川は「これは大變、錦木を他に

人形

女房 おとわ 吉田文五郎

猪名川 桐竹龜松

鐵ヶ嶽 吉田玉徳

大阪屋 吉田兵次

呼遣イ 吉田常次

身請けさせては俺の顔が立つものか」
 と、駈け出す。鐵ヶ嶽は聲をかけて
 「これ猪名川のちよつと待て、その身
 請け客は他でもない、俺だ」
 猪名川は、扱は彼奴め、九平太の手
 先となつて錦木を身請けし様としてゐ
 るのかと、
 「鐵ヶ嶽よ、一生の頼みだ、俺が受合
 つた身請けの殘金、二百兩の調達に窮
 してゐる苦衷察して、九平太が錦木を
 請け出す事を思ひ止まらせることはな
 るまいか」
 併し胸に一物ある鐵ヶ嶽は、猪名川
 の言葉尻を捉へ、「汝が惠海庵で九平
 太を打擲した仕返しだ」と、暴行を
 加へた。
 折柄、取組の番附が届くので、手に
 取つて見れば猪名川と鐵ヶ嶽の組合せ
 になつてゐる。鐵ヶ嶽は猪名川に、此
 相撲に負けて呉れるなら、錦木を禮三

郎に渡す様骨を折ると云ふ意を仄めか
 した。猪名川は無念の涙をのんで、若
 旦那の爲に鐵ヶ嶽に勝を譲らうと決心
 して別れた。

金故に、大事な相撲を振つてやる切
 なさ、摩利支天にも見放されたかと男
 泣きに泣く猪名川——が、義理には勝
 てず覺悟を決めた。

女房はこれを立聞きして、夫の心を
 察し、せき上る悲しみを態と笑顔に隠
 し、優しく話しかけて夫の髪を撫でつ
 ける。鏡に映る夫の顔は、常になく青
 ざめてゐた。

猪名川は進まぬ足を相撲場へ——。
 後に女房おとわは獨り思案にくれたが
 何か心に決して家を出た。

それは我が身を苦界へ沈め、二百兩
 を調達せんが爲である。
 夫の爲に——。

竹本南部太夫

鶴澤重造

鶴澤清友

竹澤團作

軍事保護院後援

西亭作詞並ニ作曲

新作 晴着の子寶

人形

主	庄	兵	衛	吉	田	玉	市
丁	稚	太	留	吉	吉	田	玉
床	屋	の	龜	吉	田	玉	德
町	の	世	話	方	吉	田	兵
母	お	節	吉	田	光	造	
娘	よ	し	子	吉	田	龜	夫
女	房	お	と	桐	竹	紋	太
越	後	獅	子	桐	竹	紋	司
噺	し	方	吉	田	藤	一	

床本

慌だし、年の瀬越しも明けの春、居蘇に機嫌のいつもさえ戦の中と國民は、さすが心も七五三の内、元日も昨日と過ぎて早二日酔もせず今日この頃な、佛頂面の庄兵衛が、仕末質店商ひの算盤取つて打ちつぶやき、

庄「エ、こりやまあ何の事暮れの流れ仕末と受拂ひ倍にも漸々精一ばい、これでは利にも廻らぬわい、どれもこれもろくな物持つて寄來さん、コリヤ太留吉、太留吉」

太「へい」

庄「へいじゃないわい、おとくは何處へ行つたのじゃ」

太「かみさんはいつものお寺詣りに」

庄「何じや寺參り、正月早々ろくでもない世間は戦争の最中じやぞ、バルバル艦隊が來ると云ふに旅順はまだ落ちもせず、こちとらも氣が迷入るに寺詣り所の騒ぎかい」

太「旦那さん、バルバル艦隊じやない、バルチツク艦隊」

庄「エエ生意氣な事ぬかすない、おのれもぐずぐずして居すと河岸裏の大工が店賃、明くれば早々拂ふ約束、サア早ふ行つて取つて來い」

太「旦那さん今日はまだ正月の二日、あんまりそれでは可哀想な」

庄「何じや可哀想な、こりややいこりや、店子が店賃拂ふのは當り前の事じやない

かい、明けたら早々拂ふといふによつて、元旦だけはまつてやつたがまだ慈悲心、二日でも三日でも年が變れば明けたのじや、主人の云ひ付口返事せず、早ふ行つて來い、店賃取つて來たればな、まあ一日は藪入りさそサア行け、エ、行かぬか」と、

むやくや腹の八ツ當り、しかり飛ばされ太留吉は、わがえゝに門窓な、盆も正月も泣き顔に、コリヤ助からぬ庄兵衛とつぶやき聲も内所の裏にへこそ走り行、折も表戸ガラ／＼と遣入るは町の世話方衆、それと見るより、

「これは庄兵衛さん、お内にござりますか、まづお目出度う、とは云ふものの、正月とは云ひながら國をあげての今度の戦争、旅順の安否も分らぬ内に、祝ひの言葉も何とやら、マア相變りませす宜敷ふ」と云ふ挨拶の腰折つて、

庄「アア申し／＼皆さん、何は戦争のさ中じやとて、正月は年の始め目出度事に變

りはない、ややこしい挨拶は春早々縁起が悪い、いつそ置いて貰ひます、用事有りそな、皆さん連れ、用なら早ふ聞きませふ、がなあ前以てお斷りしまするが、寄附の事なら松取れてから其外に何御用」

とふつり話の詰め煙管、火箸にほじくりすつぱりと、やに下つたる憎まれ口、むつとはすれど世話方衆、態とどばけて氣を直し、

「ナこれはお正月早々お氣に障つた言葉の不用意、御詫ひ申し上げませふ、さう申されては、話し難い事ながら、實は此の町内の植徳が息子の健三さん、暮れの三十日に召集が参りました」

庄「何赤紙が來た」
「ハイ、この町内では今度が始めて、名譽な事と皆々が心ばかりの祝もの、こちら様にも應分の、御配慮御願ひ申しとふそれで参上致しました」

と云へ共つんと返事さへ上目使ひののさり聲、

庄「イヤコレ皆の衆、誰れが極めたか知らぬけれ共、前もつて相談もなく、押し付けがましい今の話、するならするで勝手にする、名譽々々と云ひなさるが、戦さの始めに來てこそ名譽、今頃來るのはその様に大きな顔も出來ぬもの、じたい兵役にある者に御召しの來るに不思議はない、當り前の事じやないか」

とへらぬ小理窟つかふどに堪りかねて床屋の龜、

龜「ヤイ／＼強慾め、最前から聞いて居りや、乙にすましたへつは理窟、早い遅いと云ふたとて名譽に變りはあるものけえ、どれ程心あせつても御召しがなげりや仕方がねえ、それに何だつべくさとお出すのがいやならいいや、やいつとても付き合ひに、直ぐにや納まられえめえ内、初つから氣の向かれえ此の俺も外の事と違ふと云ひ同じ町内と思やこそ、言葉をかけてやつたのか、ねもぬかさすそりや何でえ、殊更目出度出征に、聞き捨てなんねえ今のほげた、わりやマ

ア唐變木か日本人か、今でこそ此の町にこふして居れど、この俺は元を正しや東京の淺草生れの江戸ツ子でえ、ならぬ勘忍なほなんれえ、サアこふしてくれろ」と、

節くれし拳上ぐれば臆つぶし、頭かかえて奥の方、もうよいいふと人々に抱き止められ床屋の龜、萬年ならぬ残念と手足振り／＼出て行く、いとどさえ寒き身そらを袷せ着の、いづれの布も世の中を、憂き苦勞かや目を病みし四十路計りの母の手を、勞はり引くも孝行の道を一筋とぼ／＼と七つばかりのやつれてし、姿も哀れ娘子立止りたる質屋の門、

「母アちゃん、あたいのべべを縫ひに來た、先度のお内はもふ此所よ、早ふ綺麗なおべべ着て、皆んなと羽根突き嬉しいな」

「チチ嬉しい／＼、もふきれいに縫えて居るである、直ぐに歸つて着せて上げ様おとなしうして居なされや」

「ハイ」と、

返事も嬉し氣に、親の心も頑是なき、知らぬ子供は表戸を、ぐわらり明けるも無心なる。

「御免下さりませ〜」と、
音のふ聲に主の庄兵衛こわ／＼うかごう

店の方、

「誰方じやな」

「ハイ先度御世話になりました土手下の山田でござります」

「ウン山田チチ左様か、三月斗り前に來たお上さんか」

「ハイ其節は有難うございました、暮れにお伺ひ申す筈、病ひ上りに目を病ひついで出そくれ、正月早々、如何とも存じましたが、是非にお願ひ申し度厚かましく参りました」

「常の年なら休む時もあるが、この非常の世の中がこちの内では猶商賣、して正月早々見えたからは、先度暗着受け出しかな」

「ハイ實はその受け出しの事」

と半分聞いて庄兵衛は、帳簿繰り／＼算

盤のけたの音さへ胸に釘、ほつちりばちりと置き仕舞、

「エエ捨緋入女着物四枚、同じく女物羽織二枚、それに子供の着物一枚、／＼七點、左様じやな」

「ハイその子供」

「エエ元利合計」

「アアもし、欲しいは子供の着物一枚、それだけお願ひ申しとう」

「アアこれ／＼、そんならそれ一枚だけか」

「ハイ外の物は入りませぬ」

「あの中で金目のあるのはその子供着が一番じや、それだけに、入れ金も高い、又利息は外の全部も貰ひますぞや」

「あの實は爰に有りますのが、内のお金の精一ぱい、足りぬ所は何れ又、達者になつたその上で、きつとお返し申します、どうぞこれにて御勘定」と、

帯に差込用意の金、おつ／＼出せば主は取り上げ、

「こりや五十錢が三枚、アアコレ／＼、

中抜き一枚が金高もの、それに利息だけでも二圓餘り、特別に心してもて六圓八十錢、これでは出来ぬ相談事」

と云はれてハツト差し迫る、愛し子供の慈愛には、心も強く取り直し涙の聲をかみしめて、

「申し旦那様、無理なお願ひながら、そこを御慈悲でござります、主は去年三月に召集受けて門出の後、近所の人の親切に私は洗ぎ賃仕事、どふやら送る其日過ぎも、思はぬ伏した病ひの床、可愛や此の子が孝行の辻占賣つて町から町、人の情に雨の日も風の日さへも分ちなく、漸々頂く幾何も薬と變る不甲斐なき、この娘の孝に漸々と床を拂ひし今日此頃、此の眼も醫者の情にて必ず治るとあるからは、元の體になつた上、きつとお拂ひ申しませふ、此所に有るだけお情に、私の物はどうなつても、切て此の子の正月の暗れ衣一枚御願ひ、子を持つ者の親心お察しなされて下され」

める、聲おもろく、主の女房奥より出て「チチ氣の毒に、私は寺詣りから歸り、仔細は聞いて居りました、いたづら盛り年頃に、辻占賣つて助けとは、孝行過ぎた娘の子、何の其心配には及びませぬ、又お前様の着物も其姿では寒かるふ共に貰ふて上げませう、健者になつた其時に、いつでも持つて来て下され、のふちいさん」

「エイ喧しいわい、又しても出しやばり奴、店の事はわしの役、お前は奥の用をせい、毎朝お詣りくと、ろくな説教聞いて来ぬ」

「それじやと云ふてお前さん情は人の爲ならずと」

エイ俺の爲にもなるものかい、これ上さん、こちとらは遊びじやない、お上より鑑札受け立派に税金拂ふて行く暖簾掛けた質商賣、情は情、商ひは商ひ泣きの涙に引きづられて潰れた質家はたんとある、これも慈悲じや、あれも可哀想じやと云ふて居ては、二進三進口が干上る、金が出来たら出

しませふ、正月早々泣き入れとは縁起でもない初夢じやと、取り付く島も捨小舟、梶も落の笹蟹が、横に泡かくふくれ面、時に表の賑はしく丁稚の太留吉轉び入り、

「旦那さんく大變く、えらい事じや」

「エイ門口から喧しい、何じやか知らぬが氣がめいりかけて居る、頭が痛い、靜かにせい」

「エエ、これが靜かにして居られますか、旅順が落ちたく難攻不落の旅順が落ちた」

「エツ、何じや旅順が陥落、そりやほんとか」

と、一瞬に言葉も泣き音打ち忘れ、母も思はず詰める息、

「本當も嘘もございません、それアノ號外の鈴の音、昨日の元日の夕方前、それ近づいた鈴の音號外貰ふて来ませう」

と一散走り太留吉は、日本勝つたとかけり行く。

「婆さんく旅順がとふく、本當に落ち

た、あの難攻の旅順が陥ちた、えらい事じや〜」

「コレぢいさんお前さんでも嬉しいかい、ほんとにお前も嬉しいのかい」

「馬鹿ッ、何ぬかすのじや、日本人である限り、これが喜ばずに居られふか、難攻〜の長い月日、この蔭には、十幾萬と云ふ戦死者の方、司令官の乃木大將まで愛しい子達をお二人共」

「ぢいさん、兵隊さんのお蔭なりやこそ、此の様に安樂に松七五三飾りの居正月、聞きやあの方の連合も戦地へお出でと云ふ話、日本人であるなれば、のふぢいさん」

「ウラウ……かみさん慾の皮の此の顔が、よう歪ますに居て呉た、今こそほとり人間の誠の心に覺めました、お詫びしますこれ上さん、勘辨して下さいませ〜、可愛い娘さんにあの着物、失禮ながらお年玉、早ふ着せて上げて下され強い兵隊さんをお父さんに持つた、ほんに此の子は幸者じや」

「且那樣、ア有難うござります、きつと〜このお禮は」

「禮もへちまも入りません、名譽の家を守るのは、銃後國民のお務めじや、四海兄弟同胞の國は世界に日本一つ、サアサア婆さん、娘さんにその着物早ふ着せて上げなされ、お前様もあの着物早ふ着て来て下さいませ」

「イエ〜私の物は入りませぬ、お情に甘へあの子だけ」

「ハテ、あやまつた此の爺父の心ざしを受けて下され」

とあなた此方をうる〜と、實に血は一つなる日の本の國の譽ぞ頼もしき、

「チチあれへ見るは獅子舞じや、目出度今日の御祝儀に、娘さんにも見せて上げよふ、チーイ獅子舞やい〜」

と、今は心も春風に、ふかれ浮かれて招かれて、勢ひ込だる獅子頭、
てん〜すてててん〜、そふれそれ〜お獅子でござる、唐のお獅子の生れを問へば、深い谷間に幾千丈の、巖そび

ゆる清涼山よ、こんのお獅子は越後の生れ、高い山から都を眺め、飛んで出でたお獅子でござる、てん〜すててん〜、四方の町々お客様へ、祝ひ納める正月の言の葉、目出度〜の若松さまよ、枝も榮える葉も繁る、濱の松風豊かに吹けば、今年しや豊年稻穂が稔る、國も榮える御民も繁昌、御代も納まり四海波風濱の眞砂は盡きるか知らず、國は盡きせぬ我日の本に生れ逢ふこそ御目出度いな、やんれ目出度御目出度ナと、祝ひ喜ぶ歌聲の實に有難き神國や、四海兄弟一元に結び合ふこそ頼もしき。

國土を母艦に

飛び立て少年

寺子屋の段

菅原傳授手習鑑

寺子屋の段

解説

「忠臣蔵」千本櫻など並んで「菅原」は義太夫淨瑠璃作品中、御承知の如く代表的な演しもの一つであり、文字通り屈指の名作であります。

初演は今日より百九十餘年前、即ち延享三年八月、大阪の竹本座の勾欄にかけられました。作者は當時の名作者竹田出雲はじめ、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作で、全五段の場割は、大序大内の段から口賀茂塚の段で齊世の君と如屋姫との漏事な後の伏線とし、切の筆遣傳授の段が四段目の寺子屋と相照應する構成、跡は門外。二段目は道行。口が汐待の段、切は道明寺で杖折檻、八摩鶏、丞相名残の各場面、

三段目は、口が車場、切は佐大村の茶釜酒、喧嘩、訴訟、櫻丸切腹と展開し四段目は筑紫配所、天拜山の飛梅、化壁咄の隠れ家、今回上演寺子屋となるのであります。今日一部に流行して居ります「松王屋舖」と云ふのは後世の蛇足で、筋から云へば寺子屋の前になるのであります。五段目は大内の段で時平一味の最期で結末をつけて居ります。

菅原道實公の事蹟については今更申上げるまでもありませんが、道實公が、左大臣藤原時平の讒言により筑紫に配流の身となり、太宰府に命を終へられたのは醍醐天皇の昌泰三年二月の事と傳へられます。當時の天下の同情は、翕然としてこの温厚篤學の公に集りましたが、恰もその頃、都に火

前

竹本大隅太夫

鶴澤清八

豊竹呂太夫

豊澤仙糸

竹本織太夫

竹澤團六

後

災がしばしば越つたり、時平一味のものが相ついで病死したり、清涼殿に落雷があつたり、神變不可思議な出来事が頻發するの、折も折として上下こそつてこの變災を、罪無くして醜所に没した菅公の祟りと信じたのであります。畏くも一條天皇は、寛弘元年道實公に最高の位を贈り給ひ、北野天神に行幸あつて此處に菅公を合祀して、その靈を慰められ、以來天神様と云へば恰も菅公の別稱のごとく考へられるに至つたのであります。

これを戯曲化したものは論曲「雷電」をはじめ、古く宇治加賀橋の語り物の中にもあり、大近松の「天神記」は直接この「菅原傳授手習鑑」の藍本となつて居ります。初演當時の竹本座は不入續まで經營困難に陥つて居たのでありますが、本編が上場されるや、全大阪擧げての大人氣で、翌年の四月まで、続八ヶ月間の大入を續けました。その原因は、作柄が優れて居ることは

勿論であります。當時大阪で唯一の人氣神である天満天神の菅公を中心人物に仕立てた所もその人氣を煽つた所以の一つでありませう。殊に作者出雲は、當時の社會記事を巧みに取材して脚色して居ります。

この作の生命になつて居る、梅王、松王、櫻丸の三ツ子の兄弟と云ふ着想は、當時大阪市中にあつた事實で、健全な男子の三ツ子が生れ、お上より、鳥目五十貫を下賜され、嘉例により舍人として牛飼に御所へ奉公させられることになつた、と云ふ評判の出来ごとであります。これが直ちに作者たちの筆に移され、源順の「梅は飛び櫻は枯れぬ菅原や、深くも頼む神の誓ひを」の改作「梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に」の歌から想を構へて人物が描き別けられたものでありませう。

全五段中眼目の場面、即ち二段目の道明寺の菅公と坊屋姫との生別、三段目の佐太村の白太夫と櫻丸との死別、四段目の寺子

屋の松王夫婦と小太郎の死別、とこの三つの骨肉の別れを作者の松洛、千柳、出雲が各自分擔して工夫を凝し書き上げたことはあまりにも有名な逸話であります。

全段の眼目中の眼目とも云ふべき四の切の寺子屋は、申上るまでもなく文章と云ひ結構と云ひ、又節付けと云ひ、名に名曲の名に背かないもので、此處に登場する武部源藏と云ふ人物は、當時幕府の書吏で門弟三千と稱せられた有名な書家建部傳内を效かした妙案であります。それにこの場面は當時の「寺子屋」と云ふ社會相の活寫であつた事は間違ひありません。

かくの如く作者の練心碎骨して立てた脚色の巧緻は、三味線道の氏靜と云はれた初代鶴澤友治郎の珠座の節付けと相俟つて、「菅原は今日に至るまで原價を持續せしめたのであらうと考へられます。殊に初演の人物造ひ吉田文三郎の考案は菅丞相や、松王梅玉櫻丸の衣裳に後世までその様式が

武部源藏	吉田玉助	妻戸浪	桐竹龜松	菅秀才	桐竹小紋	小太郎	桐竹龜之輔	よだれくり	吉田萬次郎	春藤玄蕃	桐竹門造	松玉丸	吉田榮三	女房千代	桐竹紋十郎	御臺所	桐竹政龜	手習子	大ぜい	百姓	大ぜい	取巻	大ぜい
------	------	-----	------	-----	------	-----	-------	-------	-------	------	------	-----	------	------	-------	-----	------	-----	-----	----	-----	----	-----

守られ、彌が上に本編の驛價を高からしめたのであります。

「一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の中に交まる菅秀才。」

芹生の片山里、手習ひ師匠武部源藏夫婦は、丞相の二子菅秀才を我が子に仕立てかくまつてゐた。

今日は新しい寺入りの子もあることとて、妻の戸浪は大勢の寺子たちを勵まして手習をさせて居た。

其處へ、どうやら様子ありげな女房が七つばかりの男の子を連れて訪れた名前を聞けば小太郎と云つて、菅秀才とは同じ位の年配の賢し氣な子であつた。今日からよろしく、とあるので戸浪は、かねて源藏から話のあつた寺入りの子だと悟つた。母親はそゝくさと隣村まで行つて來ると出て行くので、

後を追ふ子をなだめつゝ機嫌を取るのであつた。

間もなく外から歸つて來る主の源藏何時になく顔色も青ざめ、思案の腕組みも不機嫌に、出迎への寺子たちを、ぐゝと見渡したが、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もない役立たず、と思ひあり氣に不興な口をきくのだけだつた。

夫の顔色の悪いのを見てとつた戸浪は、山家育ちは知れてあること、それより、機嫌直して約束の寺入りの子を見てやつてくれ、と小太郎を引合はせたと、いたいけなくも手をついて挨拶をする小太郎の顔をじつと見つめた源藏は、忽ち顔色も柔いで、器量すぐれて氣高い生れつき、公卿高家の子息と云つてもおそらく恥かしからず、ハテ扱、そなたはよい子ぢやなア、と喜ばしげにほゝゑんだ。

合點の行かぬ夫の様子に、子供たちを奥へやつて、戸浪は源藏に今日の仔細を尋ねた。

仔細と云ふのはかくくであつた。

今日村の變態と云つて呼ばれて行つたのは偽り、庄屋方へ行つてみると、時平の家來春藤玄番に病體ながら松王丸が檢分の役として附添ひ、數百人の人數で源藏を取巻き、訴人によつて源藏方に菅秀才がかくまはれてあること明白、直ちに首打つて渡すか、さなくば、踏み込んで請取らう、と手づめの詰問だつた。源藏も是非に及ばず、首打つて渡す、と約束して歸つて來てはみたものゝ、それは誰か寺子の中に身替りに立つものもあるかと思案の揚句、どれもこれも育ちのよい菅秀才とは似ても似つかぬ子供ばかりで、若君の御躰もいよくつきる日が來たかと慨いてゐたのだつた。すると、今日寺入り

の小太郎を見れば、満更鳥を驚とも云はれぬ器量に、これこそと思ひ當る所があつたのである。

戸浪は、これを聞いて、松王は若君の顔をよく見知つて居る筈、と心配し出すのだつたが、若し賢と知れた時は松王めを眞二つ、叶はぬ時は若君諸共死出三途の御供せん、と夫が腹を据えるので、夫婦はやがて來る玄番、松王を待ち受けることになつた。

やがて門口から横柄に訪ふ春藤玄番首見る役として病體の松王丸が籠籠に乗つて従つて來た。

村の者たちはこの噂に我が子大事と迎へに來るのを、玄番は一々呼び出し子供の顔を檢分して歸らせた。

その後、家の中へ入つた二人は、源藏にこの上は寸時も早く若君の首を受取らうと厳しく促すので、源藏は意を決し首桶持つて奥へ入つた。

松王はあたりを見廻して机の數をしらべ、最前歸つた子供の數より一つ多いと語るのので戸浪は、今日寺入りした子のと云ひかけて口を叩み、これぞ菅秀才のお机文庫、と漸く云ひ抜けた。

奥にはバツタリ首打つ音がして、やがて源藏は白臺に首桶のせて、松王の目通りに据え置いた。

家來たちは下知に従つて、十手を振つて源藏夫婦を取巻くので、源藏は虚と云はば切付けんと、忍びの鑄元をくつろげて堅睡を飲んでまぢかまへた。

松王が首桶引きよせ蓄を明ければ、首は小太郎、ためつすがめつ窺ひ見た未、菅秀才の首に紛れなし、と云ひはつたので、檢使の玄番は大喜び、褒美にはかくまつた科許して呉れる、と首を提げ、松王は、かねての願ひの通り病氣保養の暇を願ふ、とそれ／＼出て行つた。

あとに源藏夫婦は、張りつめた氣もゆるみ、しばしはものも言へぬばかりだつたが、これぞ凡人ならぬ我が君の御高德によつて松王の眼がかすみ、賀首を知らず持つて歸つた、と天地に三拜九拜したのだつた。

其處に一難去つて又一難が湧き出た。それは、小太郎の母が歸つて來たのでつる。立ち騒ぐ戸浪を引退けた源藏は、何くはぬ面持ちで内へ迎へ入れ様子を窺つて後から只一と討ちと切り付けた。

女もしれもの、その太刀をはづしてあり合ふ我が子の文庫ではつしと受け止めた。二つになつた文庫の中からはばらばらと出る經帷子に南無阿彌陀佛の六字の幡、源藏はコハいかにと、進みかねるのを女は、菅秀才のお身替りお役に立てて下さつたか、と意外の言葉。驚いた源藏は、して其許は何人の

御内證、と尋ねる折しも、門口から、女房悦べ、倅はお役に立つたぞ、入つて來たのは先程の松王だつた。

松王のこゝばを聞くよりわつと泣き出した最前の女は、松王の女房千代だつたのである。今まで敵と思つてゐた松王がこの不審な様子に、源藏は意義を正して所存を尋ねた。

松王は三人兄弟の中、一人はなれて時平の家來になつてしまつた。そして親兄弟とも肉縁を切つて恩ある菅丞相へ敵對しなければならなかつた。これも身の因果とは云ひ乍ら、何とかして主従の縁を切らうと作病までかまへて暇を願つたのだが、今日の役目が済むまで、と今日の仕儀に及んだのだ。

松王は、まよや源藏が若君を打つ様なことはないと信じてゐなければ、さてその身替りとして誰を、と云ふことになつて、女房千代と相談し、二人の中

の一子小太郎を、これに立てたのであつた。これが松王夫婦の丞相へのせめてもの御恩返しだつた。

流石に千代は女の身の心弱く、小太郎に別れた時の事を思ひ出し又泣き伏すのだ。松王はこれを叱つたが、泣きなげな小太郎の最後の様子を聞き、賜もちぎれる思ひがするのだつた。それに付けても御恩を送らず先立つた弟櫻丸の上を思ひ涙にくれた。

序でながら若君へお土産、と北睦峨からお連れしたと云ふ丞相の御臺所を若君に引合はせた。

やがて戸浪が奥から抱いて來る小太郎の死骸を乗物に移し入れ、松王夫婦はかねて用意の白装束となり、源藏夫婦に門火を頼んで野邊の送りに出で立つのであつた。

梅川 忠兵衛 戀 飛脚 大和 往來

新 口 村 の 段

解 說

この淨瑠璃は近松門左衛門の「冥土の飛脚」を菅專助、若竹笛舩が改作したもので安永二年十二月大阪堀江豊竹座に「けいせい戀飛脚」の外題で初演された。

中 豊竹宮太夫

豊澤團伊三

切 豊竹古製太夫

鶴澤清六

梅川忠兵衛の事件は寶永年間の出来ごとで、浪華淡路町の飛脚屋龜屋忠兵衛は新町の榎屋の遊女梅川とふとした事から馴染になり、日頃の品行方正な忠兵衛もすつかり梅川に迷ひ込み、遂に金に窮した揚句、西國方から廻つた三百兩の封印金を一時融通したが、この詮議が厳しくなり入牢仰せつけられ、忠兵衛は十日許りて牢死し、梅川はその後各地へ住み替へたが不思議と馴染になる客に飛脚屋が多かつたとの事で梅川は晩年發心して尼になつたと云ひます。

全段の概略は、淡路町の飛脚屋龜屋忠

新 口 村 の 段

兵衛が榎屋の梅川と深い馴染みになる経緯は實録を大體そのまま踏襲し、封印金の封を切る動機として、友達の八右衛門を配し、これへの面あてとして公金の封を切り撤きちらし、梅川を身受けして故里新口村へ落ちる、と云ふのが趣向で、新町茶屋の封印切から次が今回上演の新口村になるのであります。上の巻が生玉の段、飛脚屋の段下の巻が西横堀の段新口村の段になつて居り、近松の「冥土の飛脚」で上演致します時は、淡路町の段、新町封印切の段、次がこの新口村の段になるのであります。就中新口村の段が最も有名で雪の日の苦しい親子の生別は、炎ゆる忠兵衛梅川の心の中と照應して、豈かしくも哀れ深い一段を形ち作つて居ります。

梗概

新 口 村 の 段

人形

忠三女房	桐竹紋司
八右衛門	吉田萬次郎
古手買	吉田駒三郎
龜屋忠兵衛	吉田玉助
傾城梅川	吉田文五郎
親孫右衛門	吉田榮三
鶴掛藤治兵衛	吉田藤一
傳がばば	吉田兵次
樋の口九右衛門	吉田兵二郎
黒頭巾	吉田多三郎
針立の道庵	桐竹紋太郎
捕手小頭	吉田常次
取巻	大ぜい

此處大和の國新口村は、たゞさへ都
 離れたわびしさに、雪さへ降り籠めて
 年の暮と云つても人影少ない片山里だ
 つた。

今日はどうしたものか忠三郎の家の
 界隈に、季節候だの古手買だの順禮だ
 のと、うさんくさい者たちがうろつい
 て居た。

大阪新町の茶屋で、八右衛門への意
 地づくで、官金の封印を切つてしまつ
 た龜屋忠兵衛は、犯した罪のほども恐
 しく、遊女梅川と手に手を取つて人目
 を避け我が親里新口村へと落ちて來た
 のであつた。

旅馴れぬ梅川をいたはりながら、親
 孫右衛門には家來同然の忠三郎の住家
 へ立ち寄つて、忠三の女房に様子を聞
 いてみると、忠兵衛の詮議の手は、早
 くも此處までのびて居ることを知つ
 た。忠三の女房が二人の顔を知らぬの

を幸ひ、それとは告げず留守の忠三郎
 を呼びにやつた。

忠兵衛が、實の親孫右衛門に直かに
 會へないのは義理と云ふものがあつた
 からだ。忠兵衛は養子として早く大阪
 へやられ、養子親の妙閑と云ふものが
 あり、言號のおすはと云ふものがある
 身の上で、今度の仕儀に及んだのであ
 つた。然し梅川と現在の様な仲になり
 今大罪を犯してしまつた忠兵衛とすれ
 ば、今生の名残りに一目親の孫右衛門
 の顔が見たかつたのだ。

障子の内で梅川としばし涙にくれて
 居たが、ふと外を見ると懐しい故郷の
 人々が、野中の鳥道を雪吹をあび乍ら
 道場参りにつゞくのが見えた。

その中に紙子の肩衣に老の足もとぼ

く〜と近づいて来る年よりがあつた。

これこそ父親の孫右衛門に間違ひなかつた。然し詞さへかはすことの出来な
い今の身の因果に、忠兵衛は身もだへ
したのでつたが、梅川も、初めて見る
我が舅、男のため孝行もしたいとつぶ
やきつゝも、如何ともする事の出来な
い夫婦なのだ。

孫右衛門は、それとも知らず此の家
の門口を通り過ぎ様とした時、ついす
べつた薄氷に、足駄の鼻緒をぶつり切
らして轉んでしまつた。これを見た梅
川はもう黙つては居られなく、走り出
て孫右衛門を抱き起した。そしてお足
も洗ひ鼻緒も上げて上げませうと云ふ
ので、孫右衛門は見なれぬやさしい女
性の出現に驚いたのであつた。

様子を聞くと、たゞ旅の者とはかり

舅の親父さまと同じ年配、生きうつし
の懐しさに、御用に立てさせて頂きま
すと云ふのだ。詞の端にさてはそれ、
と氣のついた孫右衛門は涙を押しかく
し、不行跡のわが子のいとしさを、そ
れとなく啣ち、養子親の妙閑殿は忠兵
衛詮議のため一昨日幸に入れられ、そ
の義理として、若し忠兵衛がこの邊へ
來たら、親が繩かけ渡さねばならぬ、あ
あどうぞ來て呉れねばよいが、然し一
日でも早く妙閑殿を牢から出すのが何
よりの孝行、覺悟を極めて名乗つて出
い、したがそれも親の目にかゝらぬ所
で、と血筋の恩愛に泣き沈んだ。
そして、梅川に金一と包を與へ、こ
れを路銀に遠い所へ立退いて呉れ、と

云ふので、梅川はその金を押いたゞき

この世の別れにその人に一目逢つてや
つて呉れと頼むのだつた。
然し逢へば繩をかけるか、訴人しな
ければ濟まない義理固い孫右衛門だつ
た。それではと、有合ふ手拭で目かく
して、一と間に煩へる忠兵衛と、親
とも子とも名乗らず手と手を取りかは
して名残りを惜んだのであつた。
折柄あたりは物さはがしく、今朝か
らその邊りの様子を伺つて居た巡禮た
ちは捕手の役人と打ちつれ、忠兵衛の
詮議に來たのだつたが、そのまゝ引返
して行つたので、孫右衛門は二人を裏
道から逃がし、後影の見えなくなるま
で聲をしきりに、叫びつゝ落ちゆく道
筋を教へたのだつた。

道行戀の小田巻

妹背山婦女庭訓

道行戀の小田巻

お 橋

わ 姫

竹本重太夫
竹本文太夫
豊竹つばめ太夫
竹本濱太夫
豊竹司太夫
竹本越名太夫

豊竹つばめ太夫
竹本濱太夫
豊竹司太夫
豊澤廣助
鶴澤友衛門
野澤松之輔
野澤吉三郎
鶴澤燕三
竹澤團六
鶴澤友衛門
野澤松之輔

解 説

古く幸若舞曲の「大職冠」を承け、探
淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿大臣の事を仕
組んだものに、正徳元年竹本座上演の近
松門左衛門作「大職冠」寛保三年四月竹
本座上演の竹田出雲作「入鹿大臣鼻都静」
があり、これに暗示を受けて作られたのが
此の「妹背山婦女庭訓」全五段で、作者は
近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南に
後見として三好松洛が名を列れ、明和八年
正月、竹本座に上演された。結構は雄大、
趣向は奇妙、正に王朝物の代表作で、大和
方面に於る古來有名な説話傳説を活用し、
巧妙複雑な技巧の極致を見せてゐる。

此の道行は、四段目の奥の次で、筋を記
せば、求女の風雅な姿に戀ひ焦れて、入鹿
の娘橋姫と杉酒屋の娘お三輪がその後を
追ふ。二人して思ふ男を争ふが、求女は腹
に一物あつて橋姫の裾に緒環の糸をつけ、
お三輪は又求女に緒環の糸を結ぶ。そして
其の戀の緒環をたぐり、行きついたのは
一代の榮華を極めた入鹿大臣の三笠山の御
殿であつた。奥からは、橋姫と淡海の祝言
の、手拍子が聞こえて来るので、お三輪は
氣も狂はんばかり、それを鑑七は癡著の相
ある女と見てとつて、只一刀に突き刺すが
お三輪はその生血が、戀人の役に立つと聞
いて、満足して死んで行く。

人形

橋

姫

吉田榮三郎

求

女

吉田光造

お

み

わ

桐竹紋十郎

◆序 本◆

常闇の夜毎／＼に通ひては、まだ歸るさの道もせきもせ、それも何故戀故に、やつるる所體はづかしと、佛隠す薄衣につつめど薫り、橋姫、思はぬ人を思ひわび心のたけをくどけども情なき松の下紅葉がれてたえんたまのをも殿故ならば、捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男が置手拭で、忍び／＼の出あいすま晩にござらばナコレのんやほんにさ背戸の柿の木の枝こへて、連理を契る言の葉は、それも戀中、爰は又箸中村よ一もりの長者が後と名にひびく、釜が口をも出放れて、歩むにくらきくれ竹の繁れる中を、分け行ば葉毎の露がほろ／＼とほろろ打なる雉子の聲思ひくらべていと猶心細野に立ちつくすにくやかがしにおどさるるわれが姿に又おちて、はつと立行く羽風

つれて、ちり／＼散るや柳本流るる水に裾ぬれて物思へとや帯とけの里羨し自はついに一度の情さへないて身をしる涙雨ふるの社の御燈の影か松の木の間にもちちらと見へつ隠れつ歸るさの後を求馬がしたい来て、互ひにはたと行合の星の光に顔と顔ヤア戀人か何故に爰迄後を追鳥は、もしや時の契をも叶へてやろとのお心かと胸には云へと詞には、面はゆぶりの袖几帳なるほどせつなる心ざし、仇に思はじ、さりながら、左程焦るる戀路にて、晝をば何とうば玉の夜斗りなる通ひ路は、いとふしんなり、名所を聞いたる上はこなたより二世のかためは願ふ事明させ給へとひたすらに問はれて氣にも恥かしの、もつて餘れる憂き身の上語るにつらき葛城の嶺の白雲有ぞともさだかならざる賤の女と思ふて深い疑ひの雲を晴して自か思ひも晴して給はらば

さわり (寺子屋)

どんな仰も背くまいたとへ草葉の露霜と消えても何のいとやせぬ、これ程思ふに胴慾なとけぬお前のお心は餘りむすぶの神様を祈り過したとがめかや情なの君やと恨み詫び思ひ亂るゝ薄かけそれとお三輪は走り寄り、中を隔てて立柳立遠く袂引きとゞめ、エ、聞こえませぬ、求女様、ソリヤ氣の多い悪性な、そもや二人が馴れ初めは、始めて三輪の過ぎ夜に、葉越しの月の俤はお公家様やら侍様やらしれぬ形ふり、すつきりと水際の立つつよい男、外の女は禁制としてかためし肌と肌、主ある人をは大膽な、断りなしに惚れるとはどんな本にもありやせまい、女庭訓嬢方、よふ見やしやんせ、エ嗜なされ女中様、イヤそもちとてたらちねの、ゆるせし中でもないからは、戀は仕勝に我が殿様、イヤわたしが、イヤわしがと共に縋りつ、手を取つて園に色よ

く咲草時は、男女になぞらへ、いはば云はれふ物か、夕顔の梅はものものふ、櫻は公家よ、山吹は傾城、杜若は女房よ、いろは似たりや菖蒲はめかけ、牡丹は奥方よ、桐は御主殿、姫百合は娘ざかりと、なでしこの、サアなるぞへく、なるとならずとなら坂や此の手柏の二人の女にらめばにらむ萩と萩、中にもたたる男へし、放ちはやらじと絶り付、こなたが引けばあなたがとどめ、戀の柵、蔦葛付きまとはれてくるくく、廻るや、三つの小車の花よりしらむ横雲のたなびき渡り、ありくと三笠の山、程近く、鳴く鐘の音におどろく姫歸る所は、いづくぞと求女が氣轉振袖の端にぬふてふ取りかはす縁のおだ巻、いとしさの餘つて三輪も愠氣の針男の裾に付る共、しらずしるしの糸筋をしたひしたふて。

：：イヤくこれは我が子にあらず、普秀才の亡骸を、御供申す、いづれも門火くくと、門火をたのみ頼まるる、御臺若君もろともに、しやくり上たる御なみだ、冥途の旅へ寺入りの師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子となり、賽の河原で砂手本、いろは書く子はおへなくも、散りぬる命是非もなや、明日の夜たれか添乳せん、らむうのめ見る親ごころ、つるぎも死出のやまけこえ、あさきゆめみし心地して跡は門火にまひもせず、京は古郷と立ち別れ、鳥邊野さして連れかへる。

昭和十八年十一月廿八日印刷
昭和十八年十二月一日發行

東京都豊島區池袋三丁目一四二二
編輯兼發行人 衣笠 靜夫

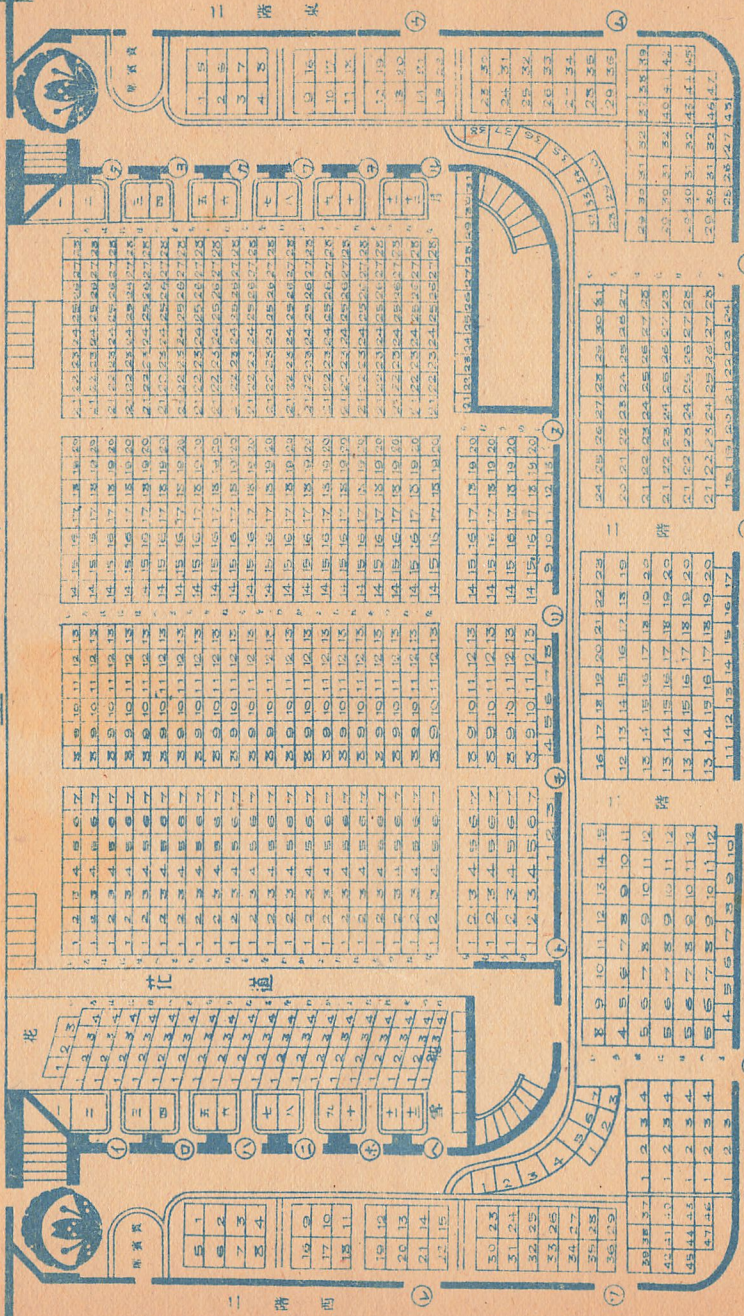
東京二〇園

新橋演舞場座席表

階
月
席

舞
臺

階
席



決戦下服装に就き

皆様へお願い



今こそ決戦、一億總蹶起の時、撃ちてしまむの氣慨に燃えて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません、演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、随つて御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

從來御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました平時なら兎に角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様の御集りの劇場ですから、服装は格別目立つのでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るとさへ云はれました、事實さうだったのであります。

新調は見合せ
今後は生活の
かましようよ

だから今日御集り下さる皆様は服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召して、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて、決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも絢爛華美な

どと云ふ舊觀念を美事一蹴し簡素、剛健、明朗な服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を、御覽下さいますやう御願ひいたします。



松竹株式會社

定價 一部 貳拾錢

